

迷走する「共通テスト」、記述式見送りだけでは解決しない「国語」問題（木村 小夜）

@gendai_biz

木村 小夜福井県立大学教授プロフィール

共通テスト「国語」の問題点

英語民間試験導入延期に続き、新しい共通テストについては、11月来、国語と数学の記述問題の制度設計の欠陥が注目を集めてきました。

そして、12月17日の文部科学大臣による記者会見で導入見送りが発表されましたが、その理由として挙げられた**採点体制の不備・自己採点の困難・問題の質に関する課題**といったことは、**いずれもかなり以前から専門家によって指摘されてきたことばかり**です。

タイムリミットぎりぎりまで見送りを引き延ばして受験生に不安を抱かせ、高校の教育現場を混乱させる必要は全くありませんでした。

制度策定から強行手前まで突き進んでしまった一連の責任の所在がうやむやなままでは、多少形を変えただけで復活してしまう恐れもありそうです。



〔PHOTO〕 iStock

実際、国会やヒアリングの場では大学入試センターと受託業者の間で取り交わされた仕様書の内容を発端として、野党から質疑が次々出されましたが、文科省・センターからはまともな回答は返ってきませんでした。

これにより明らかになってきたのは、**あまりにも杜撰な採点体制、試行テスト採点の現状、さらには業者の実態すら把握されていなかった**、という非常に深刻な

事態です。しかし、17日の記者会見で、こうした問題には一切言及されませんでした。

もちろん、このあたりに見え隠れする大きな利益相反とその隠蔽、公教育に民間業者が食い込む弊害の甚大さというものを、今回の事態を通して私達は共有する必要があります。

しかし、ここでは国語教育に関わる者の一視点から、記述問題導入の延期や中止だけでは解決しない、共通テスト「国語」問題全体の性格に焦点を当ててみようと思います。

迷走する「共通テスト」、記述式見送りだけでは解決しない「国語」問題（木村 小夜）

@gendai_biz

木村 小夜プロフィール

共通テスト全体の特徴とは

新しい共通テストは、従来のセンター試験に記述問題が付け加わっただけのものではありません。記述式部分を外すだけでは解決しない、より本質的な問題が残されています。

問題例や試行テストでは、マークシート問題（全4問）部分も含めて従来のセンター試験から大きく様変わりし、特異な出題傾向が頻出するようになりました。その特徴とは、

1. 「実用的な文章」を中心とする現実生活上の局面や課題作成など、「言語活動の場面」を仮想した話題設定
2. 種類の異なる複数資料の提示
3. 長い会話文

です。これらが組み合わされると、こういった問題になるのでしょうか。

例えば2017年実施の1回目の試行テストでは、記述問題に部活動に関する規約・生徒達と教員の会話文・図表も含めた校内新聞など架空の資料が多数並びました。それ以前の問題例にも、街並み保存に関わるガイドラインなどが記された資料・地図・家族の会話文、あるいは複数の駐車場契約書やそれに関わる長い状況説明、と同種の傾向が見られます。この3つはたまたま記述問題であったために注目されましたが、実はこれらの特徴は、評論・現代の文学的文章・古文・漢文を扱うマークシート問題（第2問～第5問）の方にも繰り返し現れます。



〔PHOTO〕 iStock

なお、少しややこしい事情になりますが、2018年実施・2回目の試行テスト記述問題では、ある生徒が探究レポートを書く上でいくつかの文章を読み進む設定になっています。ただ、それらの文章は従来の評論的な内容となり、ここで記述問題の性格が若干変わったかに見えたのです（このこと自体も少なからず受験生を困惑させたに違いありませんが）。しかし、それで「実用的な文章」がなくなったわけではなく、それと入れ替わるようにマークシート部分の第2問（評論問題）には著作権法に関わる問題が出題されました。**記述式・マークシート式を問わず、先の3つの特徴は現れ続けたのです。**

記述式の問題性と重なりつつも、恐らくこうした出題形式の方がむしろ問題の根は深いように思われます。これらの特徴はなぜ生じたのでしょうか。

迷走する「共通テスト」、記述式見送りだけでは解決しない「国語」問題（木村 小夜）

@gendai_biz

木村 小夜プロフィール

共通テスト作問の方向性とは

大学入試センターから出された「大学入学共通テスト」における問題作成の方向性等と本年11月に実施する試行調査(プレテスト)の趣旨について

(2018.6.18) には「問題作成の方向性」として、次のような一文があります。

共通テストでは、高校等における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善のメッセージ性も考慮し、授業において生徒が学習する場面や、社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する場面、資料やデータ等をもとに考察する場面など、学習の過程を意識した問題の局面設定を重視することとしています。

「主体的・対話的で深い学び」という文言は『高等学校学習指導要領』「第一章 総則」にあります。共通テストの方向性が「授業改善のメッセージ性も考慮した」ものだ、という点には注目すべきでしょう。ここでは、問題中に登場する場面が高校での具体的な学習や生活の中での問題解決・考察のありかたを指し示す、ということが意識されています。つまり、高校教育が「主体的」な学びたりえているかどうかも含めて、こうした仮想的な課題解決に向けて君自身ならどうするか、といった視点を持ち込ませ、複数資料に即して問題を解く、という意匠をほどこしたわけです。

ここからすれば、恐らく「対話的」な学びたることを目掛けて問題の随所に会話文を加えたのだろう、という推測もできます。そうした意匠や会話文によって教育現場を入試問題上に再現することで「授業改善のメッセージ性」を「考慮」した、という建前なのでしょう。大学入試によって高校教育を変えようというわけです。

すると問題は、随所に登場するこの方向性が本来の「主体的・対話的で深い学び」に結びついているかどうか、ということになります。

迷走する「共通テスト」、記述式見送りだけでは解決しない「国語」問題（木村 小夜）

@gendai_biz

木村 小夜プロフィール

理念はむき出しでは使えない

「主体的・対話的」であることが、学力を身につけるための基本的な素養として大事であることに、誰も異存はないはずです。

しかし、こうしたことが入試の局面で発揮されるのは、問題本文や問いかけ文と真正面から向き合い、これを読み込もうとして受験生が思考をめぐらせる過程という、きわめて個別的で目に見えにくい次元においてです。しかしそうであるからこそ、その過程は各受験生の能力として尊重されるのです。

ここから考えれば、会話文を含む問題を出題することで「対話」力を測れるはずもなく、誰かの立場に立って課題発見・解決のプロセスにつきあう形で問題を解き進ませることで「主体」性や他者と共感する力を測れるはずもありません。**理念の内実を熟させることなく、このように生な形で問題に埋め込んでも、それは決して良問にはならないのです。**

記述問題に関しては、受験生が多くの条件に縛られるために思考の幅を狭められ、本来問うべき学力が測れなくなっている、と度々批判されました。この点は文科相も認めたところですが、実は作問者側にもこういった形式上の条件が課せられていたように見受けられます。

与えられた枠組み（先述の**1~3**）に合うような複数の文章や資料を作問者は必死で探し、あるいは創作するのですが、それはそう容易なことではありません。結果として、切り取られ集められた文章や資料は内容が薄く、どのような学力を問うているのかよくわからない質の低い問題ができあがってしまうのです（記述問題が生きていたなら、その上に質の低い採点がなされることになったでしょう）。

国語教育に携わったことのある者なら誰でも、良質の文章を「読む」ことこそあらゆる学力の基本であることを、承知しています。にもかかわらず、それをよくわかっているはずの一集団によってこうした問題が作成されてしまったとするなら、そこには**問題作成の方向性をあらかじめ制約する、相当に強固な枷がはめられていた**としか思えません。しかも、それが恐らく教育改革の根幹に関わると見なされているからこそ、おいそれとは手放さないだろうと思われるのです。

迷走する「共通テスト」、記述式見送りだけでは解決しない「国語」問題（木村 小夜）

@gendai_biz

木村 小夜プロフィール

長文問題が出題されてきた意義

ここであらためて考えてみたいのですが、これまでの国語入試あるいは教室での国語教育が、一定の分量のまとまった文章を読むことに重点を置いてきたのは、決して惰性や怠慢からではありません。

小説・評論・エッセイ、いずれにせよ質の良い文章というものは、ひとつのことを一本調子で主張したりはせず、そこにはひとりの書き手による問いかけと答えに至る過程が示され、合間にほどよいノイズも孕まれています。読者としてその**思考過程がいかに関語化されていくかを辿っていくことは、国語という1教科を越え、人間にとって最も重要な思考力・判断力・表現力を培うために最適な訓練**なのです。

よって、入試でも、複数資料の提示や架空の局面設定といった攪乱された状況をとりにて作る必要はありません。

むしろこれまでは、読むに値するひとつの文章に即して、極力単純な問いかけ文で出題してきたはずで、それこそ、受験生は文章に集中し、また読み進む中で発現する自身の思考過程を整理し直したり言語化したりできるからです。

出題する側はそうした過程を導き出すために、問いかけそれ自体では受験生の思考・表現に十分な幅を与えつつ、一方で文章の切り出し方・傍線の引き方・問いかけ文の表現に心を砕く。各設問の関連性も考慮し、受験生の思考の深化を促せるような発問を、設問の構成や難易度の取り混ぜ方で工夫するのです。



〔PHOTO〕 iStock

〈志〉高く、実は空しい複数資料問題

もちろん、そこにもうひとつ別の文章を並べ、考察させるような問題が、時にはあっても良いでしょう。複数の資料や文章を比較・対照する力は、物事の分析や解釈にとって最も重要な手続きです。どのような事柄であっても、それ以外のものとの差異によってしかそれ自体について知ることはできないわけで、比較は思考や分析の基本です。

しかし一方で、これは相当に高度な手続きでもあり、基礎をクリアしてから臨むべき段階とも言えます。その分野に関する知識も必要ですし、熟考のための十分な時間も必要となります。よって、**短時間で行われる一斉入試での全問出題にはそぐわない**のです。

迷走する「共通テスト」、記述式見送りだけでは解決しない「国語」問題（木村 小夜）

@gendai_biz

木村 小夜プロフィール

記述問題では、採点者の都合のために解答にあたって条件を与えすぎるといった設問の欠陥が露呈してしまいましたが、以上のような観点から振り返ると、マークシート問題に残った、複数資料を参照して関連づけさせるといった体裁もまた、記述問題の条件の過剰な付与に非常に近い、と言えないでしょうか。

あらかじめ複数の資料が与えられている以上、この文脈で読み進めよ、という誘導は既に始まっており、受験生に考えさせる以前に、出題者の解釈がそこには強く押し出されています。思考を鋳型にはめようとする度合いは単一の文章を読む場合よりも強く、結果的に受験生は文章を丁寧に読むことよりも多くの情報から必要な箇所を手早く見つけ出して答えを選ぶこととなります。

しかも、これだけの労力を出題者と受験生の双方が費やしながら、実際の問題例や試行テストを見る限り、**複数資料にわたって解答を要する小問は実はその中のごく一部でしかなく**、比較対照という本来の趣旨は見かけだけのものでしかありません。

出題意図の〈志〉は高く、解答の手続きとしても高度なレベルを求めるはずだったのかも知れませんが、その実質は出題者・受験生双方にとって労多くして功少なきものになってしまっています。これまでとは違う高度で複雑な能力を要求することと、基礎学力の測定という統一的な入試本来の趣旨の矛盾が、出題の空転に結果しているのです。

何よりも、このような問題設定を比較・対照の手続きだと受験生に思わせてしまえば、それは見送られたあのような記述問題に解答することを「記述」だと思わせてしまうのと同様に、誤った教育の罪です。

本稿では問題自体を論じる余裕はありませんでしたが、[大学入試センターのホームページ](#)では、共通テストの全ての試行テストと問題例を見ることができます。複数資料の並んだ問題が新機軸を打ち出して思考力を問うものになっている、との第一印象を持たれた方には、実際に問題を解いてみられることをおすすめします。

「言語活動の場面」とは、試行テストや問題例に挙げられたような、実用的書面や学校教育の場に限定されるほど狭くて即効性が期待されるだけのものではありません。例えば従来の教科書が取り上げてきた文章などはほんの数例であるせよ、こうした文化の蓄積を読む力を身につけることによって、私達は言葉と表現

と人間に関する理解力を養ってきたはずです。

この世には読むに値する文章が山ほどあります。そして、問うに値する内容かどうかは読む文章の質でほぼ決まります。たかが入試、とは言え、柔軟な頭脳で何でも吸収できる若い人達がそこを目掛けて勉強をすることを思えば、空しく誤った努力をさせてはならないでしょう。

様々な限界があることは重々承知の上で、継続されてきたマークシート式問題。たとえそうであっても制度変更をする以上は、現行のセンター試験をなぜ廃止する必要があるのか、また、これまで述べてきたような出題内容と形式の大幅な変更によって、新たな共通テストでは果たしてどのような学力が測れるのか、あるいは測れないのか、といった再検討が必要です。さらなる迷走を繰り返さないために、こうした分析が本来の専門家集団によって公開の場でなされるべき時が来ています。